九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アンリ四世のカトリック改宗とポリチックの思想 : Guillaume Du Vair の『教皇特使Sega枢機卿猊下の1594年１月27日付け書簡に対するパリー市民の返書』

羽賀, 賢二
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 : 教授 : 言語情報学

https://doi.org/10.15017/25661

出版情報：言語文化論究. 29, pp.1-21, 2012-10-24. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

アンリ四世のカトリック改宗とポリチックの思想

Guillaume Du Vair の『教皇特使 Sega 枢機卿猊下の1594年１月27日付け書簡に対するパリ一市民の返書』

羽　賀　賢　二

小論は、1593年後半から1594年前半における、フランス国王アンリ四世のカトリックへの改宗を巡るフランスの情勢と、パリ駐在教皇特使 Sega 枢機卿が1594年１月27日付けでフランスの全カトリック教徒に宛てて発表した書簡に対して Guillaume Du Vair が反論した書簡（以下『反論』と略称する）(注1) を分析し、そこに認められるポリチック(注2) の思想を考察するものである。テキストとしては２種類の Du Vair の著作集(注3) に収録されたものを用いた。

彼の他の作品と同様にこの書簡にも自序が付されており、作品成立の事情を Du Vair が自ら語っているのでまずこれを引く。

スペイン軍は、新国王を選出することによって内戦に決着をつけるという長い間抱いていた希望を失ってしまい、また、停戦がフランス人たちの心を和解させて和平へと導きつつあるのを見て、万策尽き果てて、教皇聖下の特使 Sega 枢機卿猊下に泣きついた。猊下はスペイン軍にすっかり依存しており、教皇聖下ご自身の意図と指示に反してスペイン軍の計画を後押ししていた。スペイン軍はそれで枢機卿猊下に書簡を出させたのである。猊下はこれを各所で印刷、出版させ、小心な人々を脅かして、国王と如何なる和約も結ばせないように、また国王を健全な良心を持って承認させないように企てた。こうしてフランス語とラテン語で発表されたこの書簡は、弱い精神を持つ人々に悪い効果を与え、王国の和解と王国における宗教の保全を遅らせる可能性があるので、（フランス復興の大きな部分がこの賢慮あるお方の力による）Villeroy 殿が隠棲中の Pontoise から私に手紙を寄せられ、国王陛下が、私に、パリの一市民の名において、かつその身分にふさわしい文体を用いて、枢機卿猊下の上の書簡に反論を書くことをお望みであると伝えてこられた。あの党派［リーグ派］に巻き込まれた人々にはっきりと真実を気づかせることができ、謬見の雲を吹き払うことができるだろうというわけである。それで私はこの一文を作成した。これは印刷され国内に流布されたが、かなり不正確なものだった。(注4)

この自序により、『反論』の成立事情はかなりの程度まで明らかであるが、なお、当時の政治・社会情勢に基づいて必要な限り補足説明しておこう。

１．［背景］1593年から1594年のフランス － アンリ四世のカトリックへの改宗

既に小論「Guillaume Du Vair の『サリカ法護持演説』－1593年６月28日のパリ高等法院総会－」(注5) に述べたように、1593年４月29日から Suresnes において行われたアンリ四世陣営のカトリック教徒とパリの「リーグ穏健派」のカトリック教徒との会談において、アンリ四世(注6) は、自らの代表団の団長を勤める Bourges 大司教 Renaud de Beaune の口から、自分がカトリック教育を受けてカト

リックに改宗することを発表させた（５月17日）。この後のフランスの政局はアンリ四世のカトリックへの改宗問題を核として急展開をみせる。

アンリ四世のこの改宗の決意については、従来よりいろいろに語られ解釈されてきたが、国内統一のためには改宗する方が有利だと判断したためとする見解が主流である。ヴォルテールが『諸国民の風俗と精神とに関する試論』（Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations*）の174章で引用した、アンリ四世が７月25日の Saint-Denis における異端誓絶式の前日に寵妃 Gabrielle d'Éstrée に宛てた書簡の一節「いよいよ明日は清水の舞台から飛び降ります。Ce sera demain que je ferai le sault périlleux.」(注７) によって、le saut périlleux の一句は人口に膾炙している。ヴォルテールは更に続けて「Gabrielle の愛人［アンリ四世］の改宗はひとえに統治のためだったと思われる」と述べ、その証拠の一つとして、アンリ四世側近の或るカルヴァン教徒が改宗に賛成している例を挙げている。

> 教養ある人々には、他の何が変わろうとも絶対に変化しない「名誉律」というものがあるから、利益のために何か変更を行うに際しては、幾許かの恥ずかしさを感じざるを得ない。だがこの利益は極めて大きく、全国的であり、王国の善に直結していたから、彼［アンリ四世］の有能な家臣たちは、自らはカルヴァン派であったが、自分たちが嫌悪する宗教［カトリック］を選ぶよう国王に勧めた。Rosny は「陛下は教皇の宗教をおとりください、私は改革派にとどまります」と言った。これこそリーグ派とスペイン派の恐れていたことである。(注８)

アンリ四世としては、カトリックへの改宗はそれまで彼を支えてきた新教徒たちに不信を呼び起こし、離反を引き起こす可能性があった。実際、改宗問題が話題になった1593年以降、改革派の会議が各地で開催されている (注９)。アンリ四世はその危険を承知の上で、カトリックへの改宗に踏み切ったことになる。アンリ四世が、1593年７月25日の異端誓絶式 abjuration に際して、腹心に「パリはミサに出るだけの価値がある。Paris vaut bien une messe.」と語ったという逸話も人口に膾炙している。

Suresnes 会談で公表されて以来、アンリ四世の異端誓絶計画は着々と進行し、1593年７月23日、Saint-Denis において、アンリ四世は Bourges 大司教 Renaud de Beaune、Nantes 司教、le Mans 司教、Évreux 司教を前にしてカトリック教育を受けた。７月25日、Saint-Denis 教会の正面拝廊（ナルテックス）において Renaud de Beaune の主宰により異端誓絶式が執行された。アンリ四世はその足でミサに出席し、聖体を拝領して式は終った。

アンリ四世はこうして公けのものとなった自らの異端誓絶すなわちカトリックへの改宗を政治的に最大限に利用すべく、式直後の８月１日には３ヵ月間の停戦を発表して武力行使を中断し、寛容的・融和的態度を印象づける政策を採った。これと平行してリーグ穏健派の帰順を促すべく、「スペイン悪玉論」を喧伝する。また、異端誓絶式の直後から数次にわたり教皇の許に使節団を派遣して、破門を取り消し、カトリックへの改宗の認めるよう求めた。使節団のなかでも最も期待されていたのが、異端誓絶式の直後に派遣された Nevers 公 (注10) を団長とする使節団であった。この使節団を教皇が門前払いしたことも『反論』を書かせる契機となる。ともかく、異端誓絶式から1593年末頃までは、一時的停戦の下で、両陣営とも、Nevers 公使節団の首尾、教皇の裁定を固唾を呑んで待っている状況が生まれていた (注11)。

ここでローマ教皇庁の事情について略述しておく。1585年以降の歴代教皇を下の表に示す：

1585年－1590年　シクストゥス五世　Sixtus V
1590年　ウルバヌス七世　Urbanus VII（在位13日のみ）
1590年－1591年　グレゴリウス十四世　Gregorius XIV（在位10ヶ月）
1591年　インノケンティウス九世　Innocentius IX（在位２ヶ月）
1592年－1605年　クレメンス八世　Clemens VIII

小論で扱う時期の教皇はクレメンス八世である。本名 Ippolito Aldobrandini、1536年にイタリアの Fano で生まれ1605年にローマで没した。1585年に枢機卿に任じられ、1592年１月30日に教皇に選出された。上記の表に示したように、クレメンス八世の前３代の教皇の在位は短期間であり、この教皇にいたってようやく安定した。クレメンス八世の選出にあたっては、教皇庁に対するスペイン国王フェリペ二世の影響力行使を嫌う枢機卿たちの支持があった。クレメンス八世も基本的には反スペインであり、フランスに対しては全般的に好意的であった。クレメンス八世を枢機卿に任命したシクストゥス五世は当時のフランス国王アンリ三世と衝突し、Guise 一門、とりわけ Guise 枢機卿を後援していた。クレメンス八世も就任直後はシクストゥス五世の路線を踏襲し、1593年にアンリ四世が異端誓絶の意志を示した時には、その使節団の受入れを拒否した。アンリ四世は数回にわたり教皇の許に使者を送り、異端誓絶と改宗に関して許可を求めたが、教皇はこれを受け入れなかった。特に、1593年末に Nevers 公使節団がローマに来た時には面会さえ拒否した。教皇のこの頑なな態度はフランス国内のカトリック穏健派を失望させたが、これについては本論で述べる。その後、教皇と国王の関係は徐々に改善に向い、特に1596年以降は良好に推移する。

一方、パリのリーグ強硬派やスペイン派は、1593年７月の異端誓絶式以降、アンリ四世のカトリック改宗が一般市民のみならずリーグ穏健派の人々の支持を拡大しつつあるのを実感し、危機感を募らせる。また、パリの外部に目を向ければ、それまでリーグ派に属していた都市がアンリ四世へ帰順し始めていた。1594年１月４日には Meaux の総督 Vitry 侯 Louis de L'Hospital がアンリ四世に市の門を開いたという知らせが届き、パリのリーグ派は大きな衝撃を受ける。この劣勢の中、パリ市の死守を絶対命題とするリーグ強硬派の最大の望みは、教皇クレメンス八世がアンリ四世の赦免を拒否することにあった(注12)。このため、手段を尽くしてアンリ四世の改宗無効を訴える。各種のパンフレットの流布、説教師たちの説教と並んで、教皇特使の書簡が利用されたのである。

さて教皇特使に話を移す。問題となっているパリ駐在教皇特使 Philippe de Sega はイタリア人（イタリア名 Filippo Sega）で、1537年にボローニャで生まれ、1596年５月29日にローマで没している。1575年に司教に叙階され、1591年に教皇グレゴリウス14世により教皇副特使としてパリに派遣され、間もなく特使に昇進した。同年12月、教皇イノケンティウス九世により Piacenza（フランス語表記 Plaisance）枢機卿に任ぜられた。Sega は、パリに着任以来、スペイン大使の Feria 公と密接な関係を保ち、リーグ強硬派およびスペイン寄りの活動をとるようになった。教皇クレメンス八世は Sega 特使に対して、行動には慎重を期すよう、またフランス人の国民感情を刺激しないように指示していた(注13)が、Sega はスペイン皇女 Isabelle の即位実現に全力を挙げていた。Isabelle 即位問題が1593年６月28日のパリ高等法院における「サリカ法遵守判決」によって頓挫すると、スペイン派はアンリ四世の即位を阻止するために手段を選ばず策謀をめぐらすが、その一つが教皇特使の Sega 枢

機卿に「宣言」や「書簡」を発表させ、これによりカトリック穏健派を牽制し、彼らがアンリ四世と結ばないよう抑止するというものであった。

Sega 特使は何通もの書簡を出している。1593年初めには『異端者の党派に従っているこの王国のカトリック信者に宛てた書簡』を発して、アンリ四世に扈従するカトリック教徒に警告を発し、またアンリ四世の異端誓絶式の直前に出した『Henri de Bourbon の Saint-Denis への数名の聖職者の招集について』（1593年 6 月23日付け）では、「教皇特使殿は、停戦が決定され命令されたと聞き、宣告を発し、それを Rolin Thierri に印刷させた。それは聖職者が Saint-Denis に行くことを破門を以て禁ずるものであった[注14]」。Du Vair が『反論』を書いたのは、1594年 1 月27日付けの『この王国の全カトリック信者に向けて、最近ローマで起こった事柄に関して教皇聖下の御意志を通知する、教皇特使 Plaisance 枢機卿の書簡』[注15] と題されたものである。この書簡の内容については下記に述べる。

Sega特使のこれらの宣言や書簡は、狂信的な説教師を初めとした強硬派聖職者に影響されがちな一般民衆はもとより、アンリ四世のカトリックへの改宗を通じた平和的国内統一への希望を膨らませつつもローマ教皇の権威を軽視できないカトリック穏健派に対しても、侮り難い影響力を発揮していた。Du Vair が『反論』の読者として想定した「弱い精神を持つ人々 les plus foibles esprits」と呼んだ人々とは、このようなカトリック穏健派であった。[注16]

アンリ四世の陣営はこのような事情に通じていた。Sega 特使の書簡を論駁し、リーグ穏健派の動揺を抑えるには Du Vair が適任者であると判断した。『反論』の自序の証言のように、Villeroy の助言があったのであろう。Du Vair を選んだのがアンリ四世自身の発案であったか否かは不明であるが、少なくとも彼が最適任者の一人であったことは確かであろう。リーグ穏健派を説得できる者の中でも雄弁家として知られ、『サリカ法護持演説』で名を挙げた Du Vair が指名されたのであろう。

ちなみに Villeroy [注17] は、自伝である『覚書』の中で、この件に関して Du Vair の名前は挙げていない。Sega 特使の書簡に関する部分を引いておく。

> この件に関して陛下は Chartres に行かれ、そこで万人の歓喜と満足のもとで聖別された［1594年 2 月27日日曜日］。Plaisance 枢機卿［Sega］は善良なカトリック教徒に向けて一通の書簡を公けにされ、その中で、教皇聖下はNevers殿をイタリアの貴族としてのみ認められ受入れられたのであり、陛下の大使という資格を認めて受け入れられたのではないこと、陛下が何をされようと、陛下に赦免を与えることはないと通告されたことを明らかにした。これには誰もが大いに憤慨した。なぜなら、枢機卿猊下は、この書簡で、教皇聖下のこの拒否の理由を明らかにしておらず、全キリスト教徒の父たる教皇聖下としては余りに厳しすぎた裁きではないか、しかも陛下のような君主がこれほどへりくだり膝を屈してお願いしているのに、というわけである。その結果、多くの人たちは、陛下の聖別式と［即位］宣言という二つの行為により、まだ時期尚早と思われたのに、陛下を承認する決心を固めたのである。その理由は、一つには、陛下がご自身の改宗が真正かつ完全なものであることを臣下に保証するために、為すべきこと、為し得ることを確かに実行されていることを目の当たりにしたからであるし、他方では、枢機卿猊下が、教皇聖下は陛下をお助けくださらないと発表されて、我々をすっかり絶望させたからである。これは全く理性に反することであり、我々は宗教を失い、厄災の深淵に永久に沈められ、自分たちを慰める手段も方策もないと感じたからである。

間もなく誰の目にも明らかになったのだが、大勢の領主や貴族たちだけでなく、王国の主要都市が陛下に帰順し、忠誠と服従を誓う決心をした。貴族たちは、陛下への帰順の前に教皇聖下のご裁定を仰ぐ必要はもはやないのだと決断した。というのは、教皇特使の印刷された書簡を通して我々が知ったことであるが、陛下は教皇聖下にそれをお願いされたのに聞きとどけられなかったのだから。その上、陛下はすでに［カトリック］教会の聖体を拝領されたし、我国の歴代国王の慣例に則って誓約されたのだから。(注18)

この一節から、Sega 特使の書簡がかえって逆効果となったことが窺われる。特使の書簡の無力化こそ、Du Vair の『反論』の目的であった。それでは『反論』が如何なる構成を持ち、如何なる思想を表明しているのかを、以下テキストに沿ってみていきたい。

２.『反論』の構成と分析

『反論』は下記の書き出しを以て始まる。

猊下、私どもは過ぐる１月27日の御書簡を拝読しました。本来であればもっと前に返事をいたしたところですが、私どもは自由を制限されております。私どもの事柄を処理するための市会の開催が許されないばかりか、民衆の世話をすべき司法官たちは、臆病の余り、あるいは暴力に怯えて、すっかり休眠状態に陥ってしまい、私どもは不断の苦しみを感じつつもそれを嘆く手段さえなく、私どもに代って嘆いてくれる者も誰一人おりません。かの賢者が「私は無辜の人々の涙を見たが、彼らを慰める人は誰一人いなかった」と語ったのは、まさに今の私どもにあてはまります。私どもに代ってくれる人はおりませんから、私どもに残っている唯一の財産であるこの半ば押し殺された声を上げて、猊下が私どもに示されたご配慮に感謝を申し上げ、教皇聖下に対する私どもの忠誠心に従って、カトリック教会を脅かしている不幸を猊下ご自身にお知らせし、カトリック教会と完全に一体である私どもの救済に手をお貸しくださるよう、猊下と教皇聖下にお願い申し上げる次第です。(注19)

「１月27日の猊下の御書簡」については既に述べた。だが、L'Estoile は Sega 特使のこの書簡については言及していない。Du Vair の『反論』が出たのは Radouant によれば1594年２月10日である(注20)。「本来であれば…」という Du Vair の言葉とは裏腹に、特使の書簡から２週間後に出ているところを見れば、また、アンリ四世が指示して Villeroy が仲介したということが事実とすれば、如何に迅速に書かれたかがわかる。

上の引用文からも窺うことができるが、パリ市内では、アンリ四世の異端誓絶式以後の劣勢の中で態度を硬化させたリーグ強硬派が、中間派、妥協派への締め付けを強めていた。高等法院の関係者にポリチックが多いとして、該当者を追放する計画さえ立てられていた。Du Vair がその一人であったことは言うまでもない。

強硬派の採った手段は合法的なものだけではなかった。暗殺を含めたテロも横行していたのである。アンリ四世自身何度か刺客に襲われている。1593年８月27日には、Orléans の船頭 Pierre Barrière という男がアンリ四世暗殺を企てたとして逮捕された(注21)。Du Vair も暗殺されかかっている。1593年７月13日の夜、親しい女性の家から帰宅途中、刺客に待ち伏せされていたのだが、危ういところで難を逃れたという(注22)。この逸話は、６月28日の「サリカ法護持演説」以降、Du Vair が

スペイン派にどれほど恨みを買っていたか、いかに危険人物視されていたかを如実に示している。Radouant は犯人はスペイン派の手先であったと断定している。

上記引用部分を特徴づけているのは、教皇と教皇特使に対する免責論である。これは上に述べた「スペイン悪玉論」と表裏の関係に立つもので、『反論』の根幹を成している。ローマ教皇と教皇庁の権威を軽視できないリーグ穏健派の人々を説得する以上、教皇や教皇特使を直接批判することは当然できなかった。その他にも、アンリ四世は、1593年７月の異端誓絶式以来寛容政策を採り、一部のリーグ狂信派を除き、忠誠を誓い帰順する者には、リーグ派に参加していた時期の行為を免責すること、またその財産や職を保証すると約束していた(注23)。Du Vair の『反論』も、アンリ四世の寛容政策と歩を並べ、親スペイン的行動が目に余る Sega 特使についても、その行為はスペインに指嗾されたもので、そもそもスペインに欺かれているからであるとする。しかし、これが Du Vair の真意でないことは後で述べる。

> 猊下は、御書簡の中で、私どもがフランスおよびナヴァールの国王であるアンリ四世陛下の改宗の裁断を教皇聖下に委ねたことを褒めてくださり、教皇聖下のご裁断を仰ぐことが私どもの苦難の真の対処策であると書いておられます。しかし猊下は、教皇聖下のご裁断に従うと公言した我々が、実は教皇聖下のご命令に従うよりは、むしろ自分たちの願っている命令を聖下に煥発させようと考えているのではないかと心配されています。次いで猊下は、私どもにこの件に関するローマでの経緯をお知らせくださり、国王陛下の改宗以降にその党派に加わった人々を軽率かつ不誠実であると非難され、教皇聖下はこの件に関してどちらの党派にも与されないであろう、キリスト世界全体の共通の父として為すべきあらゆることをなさるであろう、と私どもに保証され、それゆえ、教皇聖下はこの国王との如何なる和平にも同意されないだろうし、国王がこの国家の舵を取ることも許されないであろうことは、容易に判断できると結論されています。(注24)

上の引用文では、リーグ強硬派がアンリ四世を未だに Henri de Navarre あるいは Henri de Bourbon と呼んでいるのに対抗して、「フランスおよびナヴァールの国王であるアンリ四世 Henry quatriesme Roy de France & de Navarre」と敢えて呼んでいることがまず注目される。さらに、Sega 特使の書簡に表明されたリーグ強硬派の主張の中で、Du Vair が反論する必要があるとみなしたポイントが整理されて表示されている。すなわちそれは、

① アンリ四世は異端を棄てた、カトリックへ改宗したと主張しているが、そもそも破門された者は赦免を受けなければ再び教会の門を入ることはできない。破門も赦免も教皇の権限である。教皇はアンリ四世を赦免しないであろう。
② アンリ四世がローマに派遣した Nevers 公を団長とする使節団の受入れを教皇は拒絶した。
③ アンリ四世はカトリックへの改宗を認められない以上、フランス国王になることはできない。
④ 教皇の承認なしにアンリ四世に帰順した者たちは非難されるべきである。

① については、Sega 特使の言動に関して L'Estoile に次の証言がある。

> 今日、パリの Saint-Nicolas-des-Champs 教会で、Saint-Pierre-aux-Bœufs 司祭が国王の改宗に関して民衆に次のように語った。「皆さん、私は教皇特使猊下のご命令で申し上げるのですが、今日 Navarre 国王がカトリックに改宗しました。猊下は、教皇聖下が彼の破門を解いておられない以上、人々が彼を受け入れるのはおかしいと申されています。[...] 猊下は皆さんに、教皇聖下が彼を排除するまで、忍耐強く待つことを、互いに興奮し

合うことなく、彼を受け入れることに同意しないよう求めておられます。」(注25)

上記の４つの点のうちで、この②のみは完了形を用いて確定した事実として示されている。Nevers 使節団については、教皇がなかなか接見してくれないので苦労しているという噂が1593年末からパリに届いていた。結局それは事実であった。Nevers 使節団は1594年２月に成果を上げることなくパリに帰任するのだが、その帰国を待たずに、Sega 特使はその立場を利して、使節団の不首尾をパリ市内に公表したことになる。アンリ四世の改宗に対する教皇の好意的対応を期待していたリーグ穏健派や一般市民にとって、これは失望であり痛手であった。それに対して、意気あがるリーグ強硬派がそれに乗じて更なる手を打ってくる。

③は宗教と政治という古くからの問題である。フランス国王となるのにそもそもローマ教皇の承認を必要とするのか。Du Vair はこの原理的問題に否と答えるが、詳しくは以下に述べる。しかしこの問題は、実際には政治的問題であり、スペイン国王の意図が裏にあるのはいうまでもない。既に『サリカ法護持演説』で述べたスペイン国王の陰謀を、Du Vair は『反論』でも繰り返す。すなわち、スペイン国王の考えは、最初は Isabelle 皇女をフランス女王として即位させるというものであったが、その案が破綻すると、「その後、彼らは皇女と Erneste との共同統治を提案し、次いで皇女と（スペイン国王が選定する）フランス人名門男子を提案しました。最後には、（我々が）フランス人名門男子を指名してよいとしたのです(注26)」。だがこれらの策謀はいずれも失敗した。

④はパリ市内でアンリ四世の改宗を歓迎し、和平を望む者が急増していることへの牽制であるが、とりわけリーグ派に属する穏健派カトリックへの牽制である。というのは、彼らはリーグ派に参加するときに Henri de Navarre 打倒の宣誓をしている。これに背くことは「背誓者 parjure」とされ、破門される恐れがあったからである。

> 猊下は私どもが聖座を愛し尊敬しておるとお褒めくださいますが、このお言葉は私どもにずっと変わらずに与えられてきた、フランス人に固有のものであります。私どもは、私どもの本性に由来する純真さと率直さを以て、カトリック教会は一人の認められた首長なしには立派に統治され得ないと常に表明してまいりました。[...] その後の時代に、幾つかの教会がローマ教会の首位性に異議を唱えたこともあり、対立の中で皇帝や国王の意向により別の高位聖職者が支持されたこともあり、時にはローマの目にあまる無秩序や腐敗によりローマ教会への非難が強まったこともありました。しかし私どものローマ教会への尊敬と承認は不動でありましたし、私どもは今日それがどの時代よりも必要だと考え、全力を挙げて守る覚悟なのです。(注27)

Du Vair は、制度としてのローマ教会の首位性と、その「長子」たるフランスが不断にローマ教会を支えてきたことを強調する。そのローマ教会は今宗教改革の嵐の中で苦闘しているではないか。フランスを措いてこれを守護するものがいるだろうかと問いかけるのである。しかし、ローマ教会を脅かしているのは何もルターやカルヴァンの宗教的異議申立てだけではないとする。むしろそれは世俗の権力者なのだ。Du Vair が名指しこそしないがスペイン国王を指弾していることは誰の目にも明らかである。

> 不信心者の権力や、各種の異端や、君主たちの野心的分断に脅かされたキリスト教世界が、一人の首長の指揮下に結集してその共通の救済を必要とする時があるとしたら、それは今日なのです。しかし私どもを苦しめて

いること、私どもが心配していること、つまりは私たちが今体験していることは、教会の権威を一番望んでいる振りをしている者たちがそれを転覆し抑圧しているということなのです。そして自分たちの計画を進めんがために、自分や他の者たちの野望を実現するために、民衆や国民、ひいては全キリスト教世界の救済を大げさに演じて見せているのです。(注28)

こうして「スペイン悪玉論」を明確にした後で、Du Vair は Sega 特使に向い「スペインの陰謀に欺かれずに」「真実をしっかり見極めて欲しい」という論法で、特使を免責しつつも、これまでの彼の言動を批判し是正を迫る。スペインの言いなりになっている特使の「軽率な」言動は「教会全体の善に反する」と言って憚らない。今是正するならば「軽率」だったというだけで許されようが、是正しなければ「悪意」があったのだとして責任を問われるだろうと断言する。

このことを私どもが猊下にお知らせするのは、猊下は教会が損害を受けぬよう警戒するためにここに居られるのですから、猊下が外見に欺かれて教会全体の善に反する事柄に引き込まれないようにとの思いからなのであります。なぜならば、外見に欺かれることはどんなに慎重な人にも起きることだとはいえ、しかし人々は猊下がすべてを知っておられると思っていますから、もしそのような突発事が起きたなら、それが猊下の軽率さによるとは考えずに、何か悪しき意図があるのだろうとみなすでしょう。(注29)

教皇特使の役目とは、その赴任地に教皇の意志を伝えることと並んで、その地の事情を正確に教皇に伝達し、教会全体の善のために教皇が正しく判断できるように、教皇を輔弼することにあるはずだと言う。それゆえ、特使は、アンリ四世がローマに使節団を送った事情と目的を正確にローマに伝えるべきであった。その事情を具体的に列挙すれば：

① 我々の隣国人の野望に満ちた陰謀が、我々の最初の計画を変質させ、不幸なものに変えてしまったのです。
② 以前には彼等はその策略（できることならこの国を簒奪すること、さもなければこの国を滅ぼし粉砕して彼等の敵の手に一片たりとも渡らないようにすること、そして時至らば自らの手に入れることにある）を秘密裏に企てていたが、いまでは白昼堂々と行っています。
③ 国王陛下の改宗により、我々の戦争の口実は消滅しております。
④ もし戦争を続けるなら、貴族は我々から離脱し、民衆は戦争に疲弊し、外国の君主は我々を見放し、我々は万事を勝者の意志に委ねざるを得ないでしょう。その場合、彼を穏やかな和平条件によって承認する場合に比べると、我々としては心配すべきことが多いでしょう。

以上の理由から、我々は教皇聖下に、和平の仲介者となっていただくよう、宗教の保全と我々の個人財産の保全を図ってくださるよう、お願いしたかったのです。(注30)

また、「我々」は、「我々と異なる宗教を奉ずる国王がこの国に来ることを妨げるためにこの戦争を始めた」(注31) ことを忘れるべきではない。「我々」は、聖座に、国王アンリ四世とリーグ派との仲介者となることを期待していたし、それは聖座を尊崇しているが故であった。しかるに特使の書簡では、教皇が Nevers 公使節団の接見を拒否したとされている。

『反論』は、まずそのような「門前払い」を教皇が行うはずがないとする。

しかし、今日、人々は猊下の宣言を見てひどく驚き、どう考えるべきか分からず、猊下の書簡の内容をどう

解釈すればよいのか分からずにおります。猊下は、国王陛下の改宗の事実を我々が教皇聖下の判断に委ねたことを褒めておられます。しかし猊下は、陛下が送った大使たちの接見を教皇聖下が拒否され、大使たちがローマに着く遥か前に、聖下が人を遣ってローマに入ってはならぬと命じられたとお書きになっています。(注32)

教皇聖下は全キリスト教徒の共通の父であるだけでなく、かつて最も栄えていたが今日では最も惨めな王国の安息と救済がそれにかかっているこの訴訟の判事なのです。[…] それなのにどうしたことでしょう。判決を下すべき教皇聖下が、判決を受けるべき国王陛下に門戸を閉ざしたとおっしゃるのですか。神は弁解の余地のない重罪を犯した人間を裁くときでさえ「私が会ってみよう」と仰います。神が人間を裁かれるときにはその者にお会いになるというのに、(神の慈悲の執行者である) 教皇聖下が、自分の救済の判事を勤めてくれるよう依頼している国王陛下を門前払いにするのでしょうか。我々はそんなことは信じません。たとえその判決が正しくとも、当事者の言い分を聞かないで判決を下すのは悪い判事であると古人が申しています。人間に関わる現世の裁判でさえそうだとすれば、自分の懐に来る者には決して門を閉じないことを標榜している教会の判決には、どれほどそれが当てはまるでしょう。(注33)

Du Vair は、宗教的論争に深入りすることを避け、また、瑣末な法手続きについても論争しない。司法官ではなく、「パリの一市民」としてこの『反論』を書いたのはここに理由があったのであろう。すなわち、この場合重要なのは動揺する穏健派カトリックを安心させることであり、そのためには煩瑣な神学論争、法律論争を持ち出すことは有害無益であろう。自分たちが要求するのは、既に過去の過ちを告白しカトリック教会への復帰を求めている国王陛下を教皇が受け入れることだけなのだとする。アンリ四世を教皇が教会に受け入れることは、フランス王国の利益になるだけでなく、キリスト教世界全体の利益であるし、教皇にとっても利益ではないかと主張しているのである。自分たちには党派性はない。フランス王国の利益、キリスト教世界全体の利益、ひいては教皇への讃仰の気持ちから、発言しているのだという。

彼は既に断罪［破門］され教会を追われた身だ、と猊下は仰るかもしれません。我々は国王陛下の肩を持って、猊下に対して国王陛下の弁論を長々と論ずるつもりはありませんし、陛下の臣下たちが声高に申し立てていること、すなわち、陛下に対する訴追は正当性を全く欠いている、断罪の際に通常の判決手続きを踏んでいない、いずれにせよ欠席裁判なのだから当人が身の証を立てるべく出頭した以上その判決は無効である、等々の主張をここで繰り返すつもりもありません。(注34)

我々が望んでいることは、我々の利益ではなく、この王国全体の利益、全キリスト教世界の利益を猊下に知っていただくことだけなのです。猊下の秀でたご意見を受けて全員の共通の父としての任務を勤めておられる教皇聖下が、わが国王陛下が服従を申し出られたのに、その接見や教会の恩寵や赦免を拒否されることなど我々は到底信じられないのです。(注35)

もし教皇が本当に使節団を門前払いしたのだとすれば、「それは、我国のことをまったくでたらめに聖下の耳に吹き込んだ連中に欺かれたに違いないのです(注36)」。教皇が欺かれているとすれば、それは教皇を補佐すべき Sega 特使の落ち度ともなるだろう。Sega 特使がフランスの実情を正確に教皇に伝えていないために、教皇が欺かれて判断を誤ったことになるからである。特使が教皇に伝えるべきであった事実として、『反論』は下記の事項を挙げるが、これらはすべて世俗の事柄である。

なぜなら、次のことは周知のことですから、教皇聖下もご存知のはずだと人々は思っています。

・スペイン人がこの国を簒奪するために我々の戦争を利用した；
・フランスのカトリック貴族、一部の都市と地方は、この戦争が彼らの破滅にしかつながらないことを十分承知しているから、国王陛下の側についてこの侵略に反対せざるを得なかったのだが、国王陛下にカトリックに改宗するよう常に懇願してきたし、陛下は最後にその願いを容れられた；
・彼らは国王陛下と生死を共にする決意である；
・陛下の改宗以後、また和平が破れて以来、我々の党派［リーグ派］を支持していた多数の貴族、領主、都市および地方は陛下の側に移った；
・この王国を破滅させ引き裂こうという計画を続ける外国人は、その計画を強化している；
・民衆は破産しひどく疲弊している（つまり悲惨と貧困に苛まれている）ので、いかなる形でもこの戦争を継続することはできもしないし望んでもいない；
・それゆえ、陛下がこの国全体に平和を樹立されることを受け入れるか、陛下を拒否してこの国にかつてないほど大きく危険な離教を生み出すかの、いずれかである。(注37)

「我々」には自分たちの言動を正当なものとみなす理由がありあまるほどあるのだとして、Du Vair は Sega 特使にそれを突きつけ、一緒に検討せよと迫る。

教皇聖下が、国王陛下の言葉に耳をかさず教会への受け入れを拒否なさったことや、教会の教義（それはカリタスの玄義に他ならないのですが）を現実に合わせて全キリスト教世界に平和を齎すことよりもヨーロッパ最大の王国を失っても自分の厳格さを示すことの方を選ばれたことを、人々が信じることができるでしょうか。(注38)

以下、Du Vair は教皇がアンリ四世の改宗を認めローマ教会への復帰を承認すべき理由を述べていくことになるが、その議論は二段階にわけて構成されている。

第一段階はいわば原理論である。悔悛、破門などが論じられるが、この段階では宗教的議論にならざるを得ない。それでも余り細部には入らず、できるだけよく知られた権威を引用するべく配慮されている。特に引用されるのは聖アウグスティヌスである。

破門とその取消し［赦免］については、破門はそれを受ける者を教会から追放することを目的としたものではないはずだと指摘する。

教会のカリタスとは、破門やアナテマ（その目的は、穢れた者を教会の外に投げ出すことにより、その者の汚れを除き、純化した上で呼び戻し再び迎え入れることにあるのです）を、それを通告される者たちの善を図って用いる以外には与えないということは、猊下もご存知のはずです。(注39)

この主張を裏付けるために、聖パウロや聖アウグスティヌスの言葉が引かれる。

彼［聖アウグスティヌス］は言っています。「我々の兄弟、すなわち教会という共同体に集結するキリスト教徒の誰かが、アナテマに値する罪を犯した時、離教の危険がないのであればその者を罰すべきだが、その場合でも神が命じられた親愛を持って罰すべきである。すなわち、その者を敵とみなすべきではなく、兄弟として

また迎え入れるべきである。なぜなら、あなた方は（その者を）引き抜くためではなく、矯正するためにうち建てられたのだから。」(注40)

とりわけ大勢の人びとに破門の処分を下すことには慎重であるべきだと主張する。

彼［聖アウグスティヌス］はこう言っています。「それゆえ、罪の病が多くの人を冒した時には、厳罰は慈悲へと形を変える。なぜなら、その時には分離（追放）の命令は無益かつ有害、すなわち瀆神であるから。その命令は傲慢と冒瀆となり、厚顔な悪人を矯正する以上に、力弱い善良な人々を苦しめることになるからである。」(注41)

彼［聖アウグスティヌス］は言います、「分裂という危険な傷が、単に或る者を危険に曝すだけでなく、それに引き続き多くの人々を苦しめるような場合には、厳しさを緩和して、真摯な慈愛がそのような大きな悪への救済として役立つべきである。」(注42)

教会からの排除、追放の手段としての破門の乱用は、離教すなわち教会分裂の危険を孕んでいると指摘する。破門という制裁手段がこのように慎重に用いるべきものであるとすれば、破門を通告された者であっても、その罪を悔悛した暁には、教会に復帰できるはずだと『反論』は主張する。それは既に前例のあることであるし、教会規律の厳守よりもキリスト教世界の平和と安息が重視されたためであったと、教会史を渉猟して例を引く。

なかでも我々にはあの偉大で著名なカルタゴ公会議がありました。これはドナトゥス派の事件を審議するために三百名（これほど多数）の司教で構成されたものでした。ドナトゥス派は自らの意志によって教会を離れ、度々呼び戻されても決して戻ろうとはせず、教会を嫌い、攻撃し、離教者から異端者へとなっていったのです。しかし、この公会議は、祈り、嘆願および懇願によって、彼らを呼び戻し、教会によって命じられた罰と悔悛を免じたのみならず、彼らを聖職に受け入れることは危険だと思われたし、当時受け入れられていたそれ以前の公会議によって禁じられてさえいたにも拘らず、彼らが職位に（司教位にさえ）復帰するのを受入れたのです。そしてこの公会議に出席していた三百名の司教の中で、教会の平和と和解のために、自分が司教区を去ることを拒否した者は僅か二名しかいなかったのです。(注43)

アンリ四世を非難する時の常套句であった「度重なる異端者」relaps についても、聖アウグスティヌスが援用される。

ところで、これらの箇所からどんな結論を導き出せようとも、また教会の慈悲がいかに大きなものであろうとも、「度重なる異端者」はそれ［赦免］を受けることはできないと考える人々がおりますから、私はここで彼らへの返答として同じ著者［聖アウグスティヌス］の第54書簡の一節を引いておきます。彼はこう言っています。「確かに教会では、[...] この重大な悔悛を科された罪人は、二度にわたり受け入れてはならぬと賢明かつ有益に定められている。しかしながら神の譴責は、罪を罰すべく予定された者たちを驚かした。すなわち、彼らに、その職務遂行において怒りに流されてはならぬ、法の執行者として汝ら自身への不正を復讐してはならぬ、他人への不正をよく吟味の上で復讐すべしと教えられたのだ。また彼らに、神の慈悲は汝ら自身の罪のためにも必要なのだと教えられ、法により汝らの権力下に置かれた者たちに対しては優しさをもって接すれば、その職務において過つことがないと教えられたのだ。ユダヤ人が主の許に不貞現場を押さえた女を連れてき

て、主を挑発して、法はこの女を石殺しの刑に処することを定めているがどうするかと問うた時、主は『お前たちの中で罪のない者がいたら、その女に最初の石を投げるがよい』と言われた。これによって、彼女が死ぬことを命じた法を排斥はされなかったが、彼女を断罪しようとした者たちを驚かせ、慈悲に導き戻されたのだ。彼らの良心の震えが彼らの心情の残酷さを鎮めたのだ。」(注44)

議論は第二段階において、原理論から個別的具体論へ移行する。すなわち、この段階で問題とされるのは異端、破門などの原則問題ではなく、フランス国王となるべきアンリ四世の改宗問題という世俗の地平に移されるのである。この段階において、Du Vair は彼のポリチックの思想を生彩を以て展開してみせる。

ところで、上記の例で問題とされたのは個人に与えるべき同情や憐憫に過ぎません。今日問題になっているのは、全ての民衆、国民へのそれなのです。(注45)

教皇聖下は、罰を科す相手が一個人なのか大国の君主なのか、国王のためを図ってそれを為すのか、それとも民衆の厄災を救い、教会に平和と休息をもたらすためにそれを為すのか、今が平和な時かそれとも教会の混乱時であるのかで、大いに違いがあることをお考え下さるべきなのです。(注46)

教皇に向かい「聖下を欺いて、スペインの野望のために聖下の権威を利用せんとする外国人の陰謀」(注47) に加担しないよう直言する。教皇にとって、スペインの野望に加担することは、フランスというキリスト教世界で最大の王国を失うことを意味するのだと警告を発する。「我々」、すなわち今やカトリックに改宗した国王アンリ四世を支持するカトリック教徒、を軽率であると批判し、破門を以て脅かそうとしても無駄である。「我々」は離教をも辞さぬ覚悟を固めたのだ。「我々」は、これまで長年にわたって、子（カトリック教徒）として父（教皇）を満足させるために全力を尽くしてきたが、もはや疲弊尽くしている。ことここに至れば、「自分の子どもたちの欠点を補い、絶望させないことは父の務め」(注48) である。

今やカトリックに改宗された陛下と我々が和を結ぶとしても、我々は、スペイン人が非難しているように、破門されたり偽誓者扱いを受ける心配をする必要があるでしょうか。もしも教皇聖下の恩寵なしにそのような重大なことが為されたとしたら、それは間違いなく教会にとって不幸となりましょう。我々は、自分たちの父を満足させるあらゆることをしたのです。使徒の教えによれば、自分の子どもたちの欠点を補い、絶望させないことが父の務めです。我々は極度の不便、貧困、厄災に耐えてこの戦争を支持しました。田園は荒廃し、我々の町は孤立し、市民は飢えや刀で死んだのですが、それでも我々は譲歩して和議を結ぼうとは決してしませんでした。(注49)

そもそも「我々」がこの戦争を始めたのは、フランスに異端者の国王が生まれるのを避けるためであった。それ故、アンリ四世が異教であるカルヴァン主義を棄て、カトリックへ改宗した今、戦争の意味は消失したのだ。しかもこのアンリ四世は；

継承法が王冠を授けようとしているお方、王国の大部分をすでに占有しているお方、貴族のほとんどが伺候しているお方であり、今やカトリック教徒となられ、自分の過ちを棄てられ、我々に手を差し伸べて、宗教と我々

の個人的財産を守ると我々に約束されているのです。(注50)

『反論』の議論はさらに先鋭化する。そもそもフランス王位の継承は、神ご自身と国王のみに属し、ローマ教皇といえどもこれに容喙すべきではない。王冠は確かに神によって与えられるのであるが、それは無媒介に与えられるのであり、ここに教皇が介入する余地はないとする。破門についていえば、それは教会の通告であるにすぎず、フランスにおける世俗の事柄には及ばない。それゆえ、教皇に破門された者がフランス国王となることになんら問題はないのだという。フランスはスペイン国王の支配下にある弱小国とは異なる。スペイン国王はもとより、教皇でさえフランス王国の国王継承に容喙はできないとはっきりと述べる。

今の教皇聖下はこのお方［アンリ四世］の受入れを望んでおられないと人々は言っています。このお方はまだ破門の拘束下にあり、異端は個人の意志に依存する以上、個人に結びついており、それゆえに異端に陥った者は王国の基本法に則り王位につくことができないというのです。しかし、このお方は既に異端を棄て、カトリック信仰を告白されており、王位継承の障碍は既に排除されているのです。破門について言うなら、それは当該者に教会との交わりと霊的恩寵を禁ずるという教会の通告であって、それは、フランスでは、世俗の事柄、いわんや（直接的、無媒介的に神に依存する）王冠には、何の関係も影響もないのです。スペイン国王が所有し、教会の封土である弱小の王国を、教皇聖下が自由に処分されるのは当然です。しかし、フランス王国は、一般論としても個別的にも、神にしか依存していません。(注51)

Du Vair は、歴代の教皇、教皇庁が無謬でなかったことは歴史に照らして明らかではないかと幾つもの例を挙げてみせる。それ故、或る教皇の或る行為に対して異議を唱えるとしても、それが直ちに冒瀆行為であると非難される謂れはないのだ。

ですから我々が他の国民よりも聖座への敬意が足りないと非難される謂れはないのです。なぜなら、我々はそれを口には出しませんし、聖座に座る方々には最大限の敬意を払うでしょう。聖座への敬意は欠かしませんが、我々を滅ぼそうとか危害を加えようとかいう企みは座視いたしません。(注52)

「我々」はアンリ四世と自由に和平を結び国王として承認することができる。異端者であるとか破門された者であるとか、あるいは教皇が許さないとかいうことは、妨げとはならないのだ。しかし、「いともキリスト教的なる王国 Royaume tres-Chrestien」であるフランス王国の国王がローマ教会の外にいることはキリスト教世界にとって悲しむべきことだと思われたから、アンリ四世陛下はローマに使節団を送られたのだ。しかるにそれを門前払いするとは何たる心得違いであろうか。それならば「我々」は独自の道を行くであろう。それは離教すなわち教会分裂へ続く道であろう。だが「我々」には「ガリカン教会の自由 les libertez de l'Église Gallicane」と呼び習わされた自由があるのだ。

リーグに参加した者たちは、強硬派も穏健派も、加盟時において、異教徒である Henri de Navarre を絶対に承認しないという誓約を提出していた。しかしこの誓約はもはや無効である。それ故、今アンリ四世の許に馳せ参じたとしても、「背誓者」として批判される理由はない。ましてや、それを理由に破門されるはずはない。この点についても Du Vair は二段の議論を用いている。すなわち第一段階において「誓約」とその無効化に関する原理論を展開し、第二段階において、現実問題とし

てこの戦争が如何に不正義の戦争であったか、如何にスペインがフランス王国を簒奪するためにこれを陰謀を企んだかが縷々述べられる。

> それですから、我々はもはや我々の立てた誓約には縛られないのだと申し上げます。それは次の二つ理由によります。第一は、我々の誓約の主題（スコラ学者流に言えば質料）が変化したのです。すなわち、国王陛下は当時過ちに陥っておられ、我々はそのような陛下に対する戦争を誓ったのです。我々が武器をとるこの原因が消えたのですから、その結果も停止すべきなのです。事情が変われば誓約の効果も変化し、拘束力が消滅するというのは、分明な格律です。第二に、この戦争に関わっている者たちの行動や手段は不法、不正かつ不名誉なものであり、宗教と国家を守るという我々の誓約の意図とはかけ離れた目標に向うものなのです。(注53)

Du Vair 等ポリチックにとって国家は絶対的かつ神聖な存在である。一種の「国家神授説」と呼ぶこともできるこの思想が表明される。

> 我々は、国家は神の主要で最も優れた作品であり、神のお導きと摂理なしには、これほど多くの人間の規律なく放縦に流れがちな精神が、一つの法の下、一人の君主の下に集結するはずがないと考えます。それに、もしこの世に神が嘉し給うものがあるとすれば、それは多くの民衆が、服従によって結集し、その行動を穏やかに保ち、法の規則によってその習俗を醇化しながら、統合し集うことです。反対に神が最も嫌われるのは、帝国や王国の崩壊です。なぜならばこれらの崩壊が起きるのは、混乱、略奪、窃盗、流血、殺人、強姦、瀆神、不敬などの行為を通じてであり、それが神の御意志に叶うのだと言う者は、神を冒涜することになりましょう。(注54)

とりわけ神聖なフランス王国は、幸いにも、アンリ四世のカトリックへの改宗によって和平と統一へ向っている。これに抵抗しているリーグ派に残された拠点は、他ならぬこの首都パリである。パリに残っている Du Vair 等ポリチックは、できる限り早期に平和的にパリが開放されることを願っていた。

最後に、『反論』は Sega 特使への警告を発する。その論旨は、既に大勢は決している、世論は圧倒的にアンリ四世を支持している、アンリ四世の勝利は疑いを容れない、このまま特使がスペイン寄りの活動を続けるならフランスはローマ教会を見捨てる可能性がある、更に教皇クレメンス八世が特使の今のような言動を許されるだろうか、というものである。

> この戦争が長引き、離教が確実となり教皇聖下への服従（いまでは国王陛下が手にしておいでです）が離れた暁には、聖下が猊下を嘉とされるでしょうか。
>
> この国を破滅させるなら、猊下は教会の右腕を切断することになるのです。離教が生じ、猊下がローマに帰任された時、そして教皇聖下や他の枢機卿猊下たちが、一息ついた後で、この事件を時間をかけて検討され、自分たちは教会の四分の一を失ったのだと指摘され、猊下の為されたこと、そうならないために猊下が為し得たであろうことを検証される時、猊下は安全だとお考えですか。物事は結果によって評価されます。今日猊下に微笑みかけ好意を示す者が、一番先にあなたに石を投げるだろうと考えるべきです。そして、猊下に入れ知恵をした張本人たちが、最初の刑執行人として、あなたに責任を押し付けるでしょう。(注55)

さらにたたみかけて Sega 特使の罪状を具体的に列挙する。

人は次のように言うでしょう。

・「彼がスペイン人の野望に肩入れして教会を失ったのは驚くに値しない」;
・「彼は長い間スペインで育てられたのだ」;「彼は Plaisance 司教だったから、スペイン国王の臣下だし、少なくともその主な大臣の一人なのだ」;
・「パリで彼はすぐにスペイン人とスペインに与する民衆派に入った」、「書簡を書いてこの王国をスペイン国王に売渡した連中は彼の家から動かなかった」;
・「我々は Parme 公がスペイン国王に宛てた手紙を見たが、公はその中で Plaisance 司教［Sega 特使］は最良の召使だと報告している。また、同じ手紙で、この点を考慮して Plaisance 司教を枢機卿にするよう教皇聖下に推薦したと報告している」
・「彼は両党派のカトリック教徒の和解を執拗に妨害し、敵側のカトリック教徒の手紙を読むことさえ禁じた」;
・「そのために彼は三部会においてスペインの皇女が（自分で自由に選ぶ）フランス人貴族と連帯して統治するという案を承認し勧告した」;
・「彼は説教師たちが公然とスペインに与して説教し、神の御言葉をスペイン人の野望に利用することに目をつぶった」;
・「彼は説教師たちが教皇聖下と教会の鍵を否定し、聖下は国王を受け入れることはできないとか、もし受け入れるならば人々は聖下に服従する義務がないなどと発言したのに、腹を立てなかった」(注56)

こうして罪状を列挙した後で、しかし今改心すればまだ間に合うという。

我々はかくも悪しき野心が猊下のお心に宿っているとは思いません。猊下の行動に、教会と我国の善に反すると思われるものが見られるのは、矢継ぎ早の出来事のせいであり、猊下はより大きな悪を避けるために現状に妥協せざるを得なかったのだと我々は思っています。それゆえに我々は、聖座への尊敬からして当然のことですが、猊下をお慕いし尊敬しておりますから、全員が猊下の味方になりますし、この上なく熱い祈りとともに、猊下がキリスト教世界とこの王国と我々の個人財産に同情を寄せておられると証言することを誓うでしょう。(注57)

そのためには特使が、アンリ四世の改宗を認めるよう教皇に働きかけるしかないのだとする。

神の教会に一致を、聖座に尊敬を、民衆に安息と救済をもたらす平和が来るように、どうか仲介をして下さい。統一と平和という精霊の恩寵の配分者である猊下は、もしフランスの安息の立役者となる代りに、分裂の火付け役になることを栄光とされるのであれば、精霊が猊下に対してお怒りにならないようにされるべきです。また、人々が猊下に提示する現世的栄光の考慮を、（苦しむ民衆の祈りが地上で聞き届けられなければ天上で受取ってくださる）生ける神の審判より優先するか否かは、猊下次第なのです。(注58)

3．考察

以上、テキストに即して『反論』を見てきた。幾つかの点を挙げて小論のまとめとする。

［『反論』のテキスト］

『反論』は１万語をゆうに超える長大な作品であり、通常の意味における書簡の範疇には含まれない。Du Vair の自序にあるように、1594年１月27日付けの教皇特使 Sega 枢機卿の書簡を読んだアンリ四世（の陣営）が、Pontoise に隠棲中の Villeroy を仲立ちとして Du Vair に依頼し、同年２月10日に印刷、出版されたものである。『反論』がいささか冗長であり、論旨が必ずしも整理されておらず、同工異曲の引用が並べられている箇所があるのは、この辺の事情が反映しているのであろう。すなわち、十分な時間をかけて推敲する余裕はなかったと考えられる。文体も重く感じられ、軽快でない。

また、自序の最後に「これは印刷され国内に流布されたが、かなり不正確なものだった」とあるから、パリ市内に流布したものと『著作集』に収録されたテキストには差異があると考えるべきである。『反論』のパンフレット的性格を考えると、流布したテキストの方が直接的で激烈であったと予想されるが、原資料が利用できない以上、この点については判断はここでは保留せざるを得ない。

［ポリチック勢力の結集］

Villeroy がアンリ四世に『反論』執筆者として Du Vair を推薦したことは自序の通りであろう。この老獪な政治家は国王アンリ三世の死後 Mayenne 公に仕えていたが、1594年初頭以降は Mayenne 公に失望し(注59) 領地の Pontoise に隠棲していた。その頃からアンリ四世との関係修復が行われていた。当時の Villeroy は、思想の上では Du Vair とほとんど共通し、ポリチックの一人といっても過言ではなかった。この時点において、パリ高等法院を代表するポリチック Du Vair と、フランス政界の大立者であった Villeroy との連帯が成立したことは大きな意味を持った。すなわち、アンリ四世がカトリックへ改宗する決意をするに至るには幾つもの要因があったが、その最大のものの一つは外国人国王の拒否という国民感情であった。この感情はアンリ四世陣営のみならず、それと対立するリーグ派にも無視できない底流として存在していた。Sega特使の言動はパリのリーグ穏健派がそもそも抱いていたこの素朴な国民感情に火をつけた。リーグ穏健派をガリカニストにしたと表現することもできよう。アンリ四世側近のガリカニストたちは、パリの情勢をこれを機に自派に有利に導くべく、パリに居た Du Vair 等のポリチックに働きかけたのである。この連携は３月末のアンリ四世のパリ入城を準備するものであった。

［『反論』の読者］

『反論』は、Sega 特使の『書簡』に対する反論であって、「特使その人」に対する反論ないし返書ではない。そもそも「一市民」が、パンフレットならばいざしらず、返書という形で枢機卿という高位聖職者に発言するはずもない。だとすれば、Du Vair は誰に宛ててこの『反論』を書いたのか、換言すれば誰に読ませようとしたのか。それは自序の一節「あの党派［リーグ派］に巻き込まれた人々にはっきりと真実を気づかせることができ、謬見の雲を吹き払うことができるだろうというわけである」で明らかである。

Radouant は、「彼の目的は教皇特使を愚かで醜悪に見せることや、特使一人を攻撃することではなかった。それは無理だと分っていたからである。国王の大義への賛同者を獲得しようと望んでい

たのである。Du Vair の知恵と中庸の秘密はここにあった」(注60) と述べている。とりわけ Du Vair が読者に想定したのはリーグ穏健派の人々であり、アンリ四世陣営が Du Vair に期待したのも、パリ市内にとどまっているこの人々が教皇特使の恫喝に屈することがないよう鼓舞することにあったと考えられる。(注61)

とはいえ、『反論』末尾の Sega 枢機卿に対する警告、畳みかけるような脅迫的章句を読むと、或る程度までは枢機卿その人への攻撃を意識していたに違いなく、半年前の『サリカ法護持演説』の熱気を髣髴とさせるものが感じられる。

［慎重な言葉で表明された過激な思想―ポリチックの真髄］

『反論』は上述したように抑制のきいた調子で書かれている。その点については『サリカ法護持演説』の高揚し緊張した調子と対照的である。しかし、ここに書かれている内容のいくつかは大胆なものである。その最大のものが、繰り返し主張される「離教」の覚悟である。実はアンリ四世には、カルヴァンの信仰を維持するかカトリックへ改宗するかの選択はできても、イギリス国教会の如き離教を決断することはできなかったと思われる(注62)。Du Vair がこの『反論』で繰り返すのは、「我々」は離教を辞さないという覚悟の表明であり、教皇や教皇庁はキリスト教世界の柱石たるフランス王国を失って成り立つのかという恫喝である。このガリカニスムこそ『反論』の最も重要な特徴である。

［『反論』後の経過］

『反論』がどれほどの反響を読んだか、どれほどの効果を発揮したのかについては不明というしかない。当時流布した主要な文献についてはほとんど漏れなく収集していた L'Estoile がこれについては証言していない。Radouant は「実のところ、Du Vair が説得し得たのは、既に説得されかかっていた者たちだけだった。しかしそのような者たちは大勢いたし、Du Vair が引き寄せたのがその者たちだけだったとしても、彼は王党派に多大の貢献をしたことになろう。」(注63) と述べている。

1594年２月に『反論』が出版されて以降、フランスの政治情勢がどう動いたかを略記して小論を終える。２月27日には Chartres で聖別式が行われた(注64)。その後、都市が次々にアンリ四世に帰順した。２月８日には Lyon に国王軍が入った。そして３月22日払暁、パリ市が国王に門を開く。市内の拠点を支配下に置いた後で市中に入ったアンリ四世は、ノートルダム聖堂に向かいミサに出席する。パリの陥落によりリーグ派の支配は実質的に終った。

アンリ四世は過激派説教師など一部の者を除いて、リーグに属していた者たちを恭順を条件として許した。教皇特使 Sega 枢機卿に対しても、それ以上敵対行為をしないことを条件に、身の安全を保証したが、Sega は国王との会談を拒否し、間もなくイタリアに帰った。

注

（１）　*Responce faite sous le nom d'un Bourgeois de Paris à la lettre du Cardinal de Sega legat du Pape, du*

27. de janvier 1594. 以下『反論』と略称する

（2） 宗教戦争下のフランスにおいて、強硬派カトリックに与せずに和平を最重要課題として活動した官僚、上層市民たちを指す。カトリック穏健派に属し、ガリカニスムへの共感を持っていた。

（3） ① *Les Œvvres dv Sr Dv Vair Premier President av Parlement de Prouence,* 1614 ; Olms Verlag, 1973

② *Les Œvvres de Messire Gvillavme Dv Vair Evesqve et Comte de Lisievx, Garde des Seavx de France, Derniere Edition, reveve, corrigée et avgmentée,* 1641 ; Slatkine Reprints, 1970

『反論』に関して①では p.78が欠損している、それ以外に関しては２種類のテキストに大きな違いはない。以下の注においては、重大な差異がない限り、煩雑を避けるために①の頁のみを『反論』p.75の如く示す。

（4） 『反論』p.74-75

（5） 九州大学言語文化研究院「言語文化論究」28号

（6） 従来 Henri de Navarre と表記してきたが、小論ではアンリ四世と表記する。

（7） L'Estoile も同じ言葉を引用している：L'Estoile, le vendredi 23, juillet, 1593。

なお L'Estoile のテキストとしては

① *Mémoires-Journaux de Pierre de L'Estoile, édition pour la première fois complète et entièrement conforme aux manuscrits oroginaux, par G. Brunet et al.,* Paris, 1878、および

② *Pierre de L'Estoile, À Paris pendant les guerres de religion, présenté, annoté et mis en français moderne par Ph. Papin,* Paris, 2007

とに拠り、① , VI. p.63の如く示す。

（8） Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations,* Chap. CLXXIV

（9） たとえば1593年７月の Sommières、11月－1594年１月の Mantes における改革派政治会議など。

（10） Louis de Gonzague, 1539 – 1595。イタリアの名門貴族に生まれ10歳でフランス宮廷に入る。穏健な人柄と敬虔なカトリック信者として知られていた。リーグ派に参加していたが、その後、フランスの内乱を終結し、国家を統一する唯一の道はアンリ四世のカトリックへの改宗であると主張した。なお Nevers 公に関しては小論「Guillaume Du Vair の『和平の勧め』」、九州大学言語文化研究院「言語文化論究」27号参照。

（11） 教皇クレメンス八世によるアンリ四世赦免問題の決定には結局2年以上かかった。教皇が最終的に赦免を与え、アンリ四世をカトリック教会に受け入れを決定したのは1595年９月のことである。：Michael Wolfe, *The Conversion of Henri IV,* London, 1993, p.172

（12） Michael Wolfe, op. cit., p.172

（13） Arlette Jouanna, Jacqueline Boucher et al. *Histoire et dictionnaire des guerres de religion,* p.1028

（14） L'Estoile, le jeudi 22, juillet, 1593, ① , VI. p.61

（15） *litterae illustrissimi cardinalis Placentini sanctae sedis apostolicae in regno Franciae de latere legati, ad universos ejusdem regni catholicos, quibus Summi Pontificis mens circa ea, quae nuper Romae gesta sunt, significatur : Lettre (s) de Mgr. l'illustirissime et révérentissime Cardinal de Plaisance Légat de N. S. Père et du S. Siège apostolique au royaume de France à tous les catholiques du mesme royaume par lesquelles est déclarée l'intention de Sa Sainteté touchant ce qui s'est n'agueres passé à Rome.*

（16） Du Vair は基本的に下層民衆を対象としない。『反論』の理解にはかなり高度な教養が必要であり、その読者層を那辺に想定していたかが分る。この点についてヴォルテールは次のように

書いている：「多数の真の市民たち vrais citoyens は、苦難と外国勢力の軛に疲れ果て、和平を希求していた。しかし民衆は宗教に縛られていた。」（Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations,* Chap. CLXXIV））」

（17） Nicolas IV de Neufville, 1543-1617。16世紀後半から17世紀初頭の政治家。Henri III に重用され、ほとんど宰相の地位に登り、Henri III の意向を受けて反リーグの立場で活動したが1588年に失寵した。Henri III 没（Villeroy が暗殺に関与したとの説がある）後には Mayenne 公の顧問となるが徐々に疎遠となり、アンリ四世がカトリックへの改宗を条件として国内統一を図るしかないと考えるようになる。1594年２月、アンリ四世より破格の待遇を得て帰順した。

（18） Villeroy, Mémoires d'État, édition Paléo, Paris, 2004, tome II, p.109-110

（19） 『反論』p.75

（20） René Radouant, *Guillaume Du Vair, l'homme et l'orateur jusqu'à la fin des troubles de la Ligue,* 1907, p.354

（21） Barrière はリーグ強硬派である Saint-André-des-Arts 司祭に教唆されたと白状した。：Arlette Jouanna et al., op. cit., p.387

（22） この件については Radouant に詳しい。Radouant, op. cit., p.345

（23） 事実、アンリ四世が1594年3月22日に待望のパリ入城を果して以後、処罰した者は約120名に過ぎなかった。Feria 公、Sega 枢機卿、Nemours 夫人などの大立者たちには、以後敵対行動をとらないことを条件に身の安全を保証した。：Michael Wolfe, op. cit., p.179

（24） 『反論』p.76

（25） L'Estoile, le dimanche 25 juillet, 1593, ① , VI. p.67-68

（26） 『反論』p.79

（27） 『反論』p.76-77

（28） 『反論』p.77

（29） 『反論』p.77

（30） 『反論』（この部分は①では欠損）②，p.620

（31） 『反論』（この部分は①では欠損）②，p.620

（32） 『反論』p.79-80

（33） 『反論』p.80

（34） 『反論』p.80

（35） 『反論』p.80

（36） 『反論』p.80

（37） 『反論』p.81

（38） 『反論』p.81

（39） 『反論』p.81

（40） 『反論』p.82

（41） 『反論』p.82

（42） 『反論』p.83

（43） 『反論』p.82-83

（44） 『反論』p.83-84

（45） 『反論』p.85

（46） 『反論』p.86

(47) 『反論』p.87
(48) 『反論』p.87
(49) 『反論』p.87
(50) 『反論』p.87
(51) 『反論』p.89
(52) 『反論』p.89
(53) 『反論』p.91-92
(54) 『反論』p.96
(55) 『反論』p.97
(56) 『反論』p.98
(57) 『反論』p.98
(58) 『反論』p.100
(59) Villeroy の『覚書』によれば、Meaux の町がアンリ四世に降伏した後、Mayenne 公に書簡を送り、「もし公が和平を結ぼうとせず、高等法院関係者や市の役人のような公的人材を使って和平に努力していることを人々に示さなければ、誰からも見捨てられるでしょう。敵は勿論のこと、最も親しい友でさえ、公の性格の弱さと運の悪さによる悪評にうんざりしているのです。」と忠告したのに、聞き入れられなかった。: Villeroy, op. cit., II, p.108-109
(60) Radouant, p.355
(61) Radouant はこの点についてこう述べている。少し長くなるが引用しておく。
「Du Vair は多くの点で la *Satyre Ménippée* の著者たちと一致しているが、自分のテーマを彼らのようには扱っていない。la *Satyre Ménippée* の著者たちは自分たちが面白がり読者を面白がらせることを目的としている。Du Vair は立証と説得を目指している。また、両者が相手とする大衆は同じではない。la *Satyre Ménippée* の著者たちは決意の固いポリチックと王党派を読者に想定している。この読者だけが彼らの苛烈さ、自由な冗談、過激な先入観を味わうことができる。躊躇している者たち、多少なりとも「リーグ」へ親近感を持っていた者たち、あるいはその感情を今も引きずっている者たちは、たとえそれが間違いであったとしても、自分たちが尊重していたことが容赦なく攻撃される論争に、傷つけられずにはいなかった。これに対して、Du Vair が味方に引き込もうとしていた人たちは、もし彼がローマと一戦交えようとしたり、反抗者の態度をとるならば、彼についていくことを躊躇するだろう。逆に、Du Vair が先達となって、教皇とその代理人［特使］へ最大限の尊敬を保ちつつ国王を承認することが可能であれば、この人々の疑心やためらいは容易に消失するはずである。彼のこの慎重さはリーグ派を安心させるものだった。なぜなら、この手紙の著者は彼らの仲間の一人であること、彼らの希望や幻想を共有していること、もし彼が「同盟（リーグ）」を脱会しても、昔の仲間や共有していた思想を節度をもって判断してくれるだろうと納得することができたからだ。また、la *Satyre Ménippée* の著者たちが二番手に過ぎなかったというのは当らないとしても、彼らはせいぜいのところ、戦闘員の心を奮い立たせるラッパ手でしかなかったと言ってよい。Du Vair は自ら戦闘に参加した。戦闘の只中に居て、攻撃を受けている身なのである。」: Radouant, op. cit., p.357-358
(62) 「最下層民はこの点についてお偉方や賢い方たちを従わせる。彼らが最も人数が多いのだ。彼らは無分別に引きずられる、彼らは狂信的である。そしてアンリ四世はヘンリー八世やエリザベス女王の真似はできない。彼は改宗しなければならないのだ。」: Voltaire, op, cit.
(63) Radouant, op. cit., p.371

(64)　Chartres で行われたのは、伝統的に国王聖別式が挙行される Reims がまだリーグ派の支配下にあったためである。